

○ワークショップ参加以前の気候変動「適応」の認知と、参加後について

- ・回答者の半数は、ワークショップ参加以前から「適応」という言葉と意味を知っており、行動・取組がとられていた
- ・ワークショップ参加後も概ね「適応」を認識して行動・取組を継続していた



・ワークショップ参加者は日頃から地球温暖化対策や地域の防災などの活動に携わられている方が多く、気候変動の認識が薄い層への周知・啓発というよりは、**すでに適応の行動をされている方への情報共有や意識向上の効果**があった。

○ワークショップ参加後の意識・行動の変化について

- ・天候を確認し、在宅勤務への切り替え、不要不急の外出の自粛、作業時間帯・移動手段・服装・持ち物(日傘、水筒など)の選択を判断している
- ・防災グッズの準備・防災アプリ・ハザードマップなどの防災情報の確認をしている
- ・出前講座や自治会での講演などで環境に配慮した行動変容を促している



・暑熱対策や防災など、行動様式に気候変動の適応が取り入れられている

○気候変動に関して新たに気づいたことや課題に感じていること

- ・日傘・空調服の使用や水筒持参など暑さ対策をしている人が増加している
- ・今年は農作物被害による価格高騰や定期便の遅れが目立った
- ・講演した際など、対策の効果が不明で実感が湧かない、具体的な行動がわからない、面倒くさいなどの声が聞かれ、適応策によるインセンティブの必要性を感じる



- ・緩和策のように効果を定量的に評価しづらい
- ・適応策を行うモチベーションを向上させるための工夫が必要

○県気候変動適応センターの情報発信に期待すること

- ・「県内の気候変動影響」や「適応策」の発信が全体の7割以上を占める
- ・発信方法は、セミナー・講演会、SNS、県広報誌、テレビ・ラジオなどさまざまな媒体での情報発信が望まれている



- ・ニーズに合わせて情報内容・媒体を検討